弓毛高

安方忠義傳
前編下帙四冊
巻之二

へ13
3237
6

門 へ13
3237
6

昭和十年七月九日 購求

善知安方忠義傳前編卷之四

江戸 山東京傳 著

緑亀館文庫

起居の里

第十三條

そも相馬太郎良門ハ諸国をめぐり武藝を琢磨し身を凝しけるが。その身怪力も父将門ふ相おとらざる。手ふたつ者もたりとて。そは四五ヶ月かゝる三四ヶ月逗留して。その国の風を問其人の機を察しなみ王化に怨く我味方ふしたがひ者まれなりければ。東山道を去り北陸道より越後国ふいつる。松崎とのふ宿ふ近ぢかに。木の根ふ尾うせ[illegible]ひ。四方を眺居たる。前なる池のうちふ。一尺ばかりの小蛇水上ふうゝび。芦の葉ふのぼり。天ふむかひて度くおどりあがる。口より一道の白気を吐とゝ[illegible]が。晴天俄ふかに曇。猛雨車軸を流し。烈風樹林をたふし。電光暴ると閃

霹靂崇さとなりて天柱も折け地維も崩るかとそふうちふ村の黒雲池の上みおちかゝりて暗夜のごとくみなり。水を巻あげて大なる滝とさしなみかけるごとくなれど。その小蛇黒雲のうちより飛入全身はいくばくとしらべども。其丈数十丈の大蛇となる。双眼ゑ金光を出し巨口をひらくれ。炎のごとく舌頭を吐いだし。雲中みゑをひらぎ〳〵て。つひみ外天をゞ呑たるとける。良門はあるくびゝ烈風みゑ吹倒さるゝて。起得ざるけるが大膽強気の者なれば。大木み抱付くその始終をゑとゞけぬ。ゆがうみその尾ゑ見ぬ。ゆみ大虚み入なる時。風雨おさまりて雲散じてもとの晴天となりぬ。扨此おとゝゑなるゝみ。大路おちいりそ池とひろふなり。大木折け岩石砕て〳〵なるものゝ〳〵ど。良門ゆゝ〳〵ど。我大儀を〳〵ぶる時節み竜の升天と見なるゝ。なるゝ吉事なるゝ。そもく竜い背み八十一の鱗ゝ九くの陽数み具とぞいふなる。変化竜のごとくみあゞどんべいゝでゝ天下ゑ飛動さる夏あさりんや。我今の才い則小蛇なりゝみ却ふとも時いゝでゝ升天ゑ為ふなるゝど。自心を慰なるゞ。此時日い已み暮なるとけれいそゝ宿をもとゝめやと。松崎の宿みいゝるとけるゝ。駅中の男女おゝさゝけびて大み騒動と。その為体をゝるゝみ民家尽く吹倒され。桁梁みひゝれて死さる者もあるゝ。或い人馬を天ゑ吹上て中〳〵あるこなどのひ。東西み走ちびひて騒なりるゝ。かゝるい宿をもとゝむべゝ便もをゝりく夜通みゝゝそ越中み打越めと。明松をもゝゝそふゝそし。大路み散乱なる戸障子雑具のたぐひ紙ふゝゝん〳〵。道をいをゝて馳去けるゝ。さゝてゝみ越後越中の境み親ゝゝ子ゝゝゝと称る所あるゝ。是乃立山のさゝそゝめて北海へさゝ出なる所なゝ。歌村と〳〵所ゝゝゝ。市振の宿までを山の下とゝひて二里半なるゝあるゝ。

蜃蛇外天の圖

一方は鍔くたる巌壁なり。一方は衆々たる大海なり。中なる道をひくくすあくるに波おぼぼみそひて往来もとゝろく嵒壁に穿たる洞穴あり。これ何の為ぞなれば風たゞしく波あらければ通ることもなし。かの穴入て波を避る為なり。時ありよりいく日も穴ありて出ざる時あり。されば北陸道第一の難所とぞいふなる。良門申して已に此所より帰りて。その半みいくたりかぶ折〳〵も北風たゞしく明松を吹けし東西くらして海陸を難ぜずと。殊更波高く岩壁に折かけて前後の道をたちぬるばせんとぞなる。かの岩穴に入嵒のうちなる尾うみて。風波のきづかるをまちぬられさへ十分の難儀なるに。飢のぞみてたゞ〳〵。さるとの大丈夫も。たゞ息はたえて居たる所に。やゝありて穴のおくふ鉦打声きこえ。良門声かけ。そこなるふる修行者まそおいとやん。某を遠国の旅人なるぞ。飢にはらいたて難儀ぞ。

飢のたくらへあるべゝ玉ひとつふ。奥よりそ答て。そこ安き所望く幸みたくらへあるべし。進ぜやとゝべ〳〵とて出来るとそれば果して回国の修行者なり。修行者良門がそばちくよりて。顔をつゝく打まもりけるが。たちまち飛ちきりて地上にねゝぐれたるうやしくのひけるかゝ。やがてしや平太郎君。御乳忘れ玉ひたるゝ。某を路鳥沼太郎則友みくこゝふ良門心ばえてかれとよくくそなべ。幼年の時の庵室にて對面したる者なるべ。こゝろひうけざることとのひて。詞をかけくあーらひけと。則友ちくよう。某君の御ちく伝尋。中上ぐれ子細あるとて。東山道をめぐる。今日此所をとゝざるとて急病起りて歩行ぢ。ぐれたるとゝ。せんとあく此穴にやとゝひやうくこゝろよれとおぼえ。ひーが折ふ〳〵風波あくくなりて出ずくとあるとゝ。こゝに全く君の御乳のあぐれ時節のさくとふちりとて。手をおびさそ当国三山に於

て善知安方が亡霊みあひ。良門兄弟悪意発起の子細。安方諫死の
様子を同なる事を始として。錦木が節死夫婦の霊鳥と化したる終末
くわしく語て。其安方が忠志をつぐべき諫をなすなれば。何とぞ悪意をひる
べし。剃髪染衣み御姿ばかりにて。亡君の御跡をひまなしに涙をぐるふ諫
ると。良門面をそむけそく耳をつぶし。みぐるりに居たるが。たちまち仏み
うばれ詞をかけてひけるは。汝等が忠義のわど貫る
みあるなり。我一旦大儀をムいぐつるとへども。諸国の人気をころむる
尽く王化ふ伏して。我味方ふつく者一人もなしかくてハ企及ざるべく
心とひるべし。出家となるべし存念なり。心安くこふ〻ーとつぶやきて。左様
みて少ひ。ゆう苔の下なる安方夫婦。さぞ安堵をうまらんとてこぶろふ抜
ひられ〜泣みたれける油断の体をみるなり。手ぐやく腰刀を抜て首ハ

打落し。足をあげて躯を蹴たるせば。血ハとくくとうちあがれ。首ハ
たちまちとて。たるうむふの岩のたるふがんごとくひつき。怒る眼み涙を
たらくとおとしたる形勢。げみ理とぞ見られる。此時しも風又一ちきとなり
く吹。波の音ごとくひびきて。雷のとどろくとおがえけるが。沖の方ハ一
の火の光かをうみひらめきそえ。良門血ハ流ぬぐひつとれとえて。海
人のたく漁火なるかとみるさへなく。かの火ハ次第ばかりなる
怪しやこそふ所み。風ふこだるる高波のおちあふ谷の渦巻うちより。陰
火内こと燃あがり。怪き人ばけ二人まぢぞあらはれける。折しも月ハ朦朧
こしてあのくけとど。陰火の光ハよくくえれば一人ハ男一人ハかちの。
ひみ手ハひきあひ。打よる波ふ中ばとなりて。ちぐごとえたるも頭み
乱せるふ黒髪。みまとひたる所ハ赤ろきもの。そべて水みそぶぬれて。

雫まくらに肉脱疲痩の体あぢくに善知安方が霊魂ようこがひなし。女房妻の錦木こそ哀もつれけるぞ。ぞくて二人の幽霊い波打ぎわ水ぎわ。ひたしてひとし伏。安方がとうるる声そいひけるを。我く冥途みおくこと。とく御兄弟の御夜の心みやうと。地獄のせめの苦しさうちも成仏へ願ひどて。唯あしたの御心のあわれ。御企をやろまへしこそ。それのこ心みたへまぐくこそ。浮うもやこそ此様ふ。間浮のうちふ往来し。海水ひとこと猛火ふやうれ。死限死量の苦しさをうけいづるも。皆是おん二方の御夜をふ。ふ四ぞ露ぞうるも我くり志をあらとこまふ。御心あふぶ。やうがれが諫を御同ぞけぐきれ。といぶ。錦木もその尾をみつさ。夫ゆあるる条。何こそめちひあひてくとて。夫婦さうくと泣形勢。ひとも哀ふそたとひ土ふて法ふこそふ人。鉄ふて錆ふしたる人ありとも。忽あわれこの心汰

起こそぐきふ。あくまで悪意ふ凝たる良門ちるとぶ空ふく風と同ふて。両人をもてことふくこ。執念深こさ奴原ふる大望を折く死益の諫言同もうこくいふ。こそこくく立ふるはじやといひくかをこうもあわして。斬払ひければ両人の姿たちまち二つの鳥と化し。善知く安方くとなこそ汁の方へぞ飛去ける。良門これを怪とへひぐ。心ふ益ひるまぐと。鵠沼が躯をひた起し。世をきのぶ才ふへ。これ究竟の姿ありと心みうるぐき衣服をきてとて。血を洗落して着たりけるが。此時巳ふ風波ぎまうけ。此ひふふもくだしと。笑をこうてせふひ。錫杖をつき全く修行者ふ粉して。鉦ふなじて。市振の方へ急ぎ出さぬ。笑ふ又善知が一子千代童い。路鳥沼太郎ふきぐひ。旅のうちふ月日をおくりて。敵老熊がやくへと尋ね。此所ふいくるが。則友急病起りて苦しけるを。岩穴の内ふ

善知鳥沼太郎
善知鳥沼太郎
平太郎良門味方と
あつまるため諸国と
めぐり越中越後の
境ゐて
とだ(ゑ)打ゆき
善知鳥夫婦の
幽霊海中
ちとあく
つかて
良門と
ゐ

善知鳥沼太郎

やとゝいせ。おの〻〻歌村へ糸もとゝみ出けるゆ。折ゐ〻く風波起りて。
皈来ることあるべゝと。扨も気づ〻や翅を〻き支よと気とゐせゝて。
半途ゆ二時だゝて相待。ぞうや風波おそ〻ゐとけ〻ば。飛がごとくゆ〻せ
へゝて。かの岩穴ゆらゝぎけるが。此時已ゆ良門が立去たる後なりけり。
さて千代童首なき躯の赤裸ゆて。うつぶ〻ゆ伏居たるをゝつけて大ふ
驚き。あの岩のもとゆ首あるとゝつけて。ぢゝて則友が屍なることと
ゝ。とゝへるもいふとあらてまゝとゝ。目もくれ心もきえて。絶入さゝち
ゝけるが。幼けれども丈夫者なれば。心をまぎらして。ゝひけ〻。
かく衣服をたぎたるうへゝ笈も錫杖も失たるゝれば盗人の仕業
なるべゝ。さはゝても伯父人。たゝひ三人五人の強盗なりとも。物の数と
さる人まいあ〻ざるゝ。かく〻みと首おゝ見ゆゝ。病ゆ若き居

あひ〻をだ〻ち打ゆ去るゆ疑なし。ゝひまゝいせば我ゆだゝて。因果の者
なるべゝ父母とゆ非業の死を遂ゝ。幼ゆ〻ゝ危く生残り法〻ゝ〻ゝて
敵老熊が面くゝへ。たゝ一太ゆ恨ゝて母人の遺恨をこゝろさせゝ
さんと。夫の〻ゆ心をゆ〻ゝ。杖柱とたのゝ法る伯父人の。又ゆくゆ〻ゝ死
を遂ゆ。ゝ〻る宿世の報ぞや。神も仏もゝ〻ゝ遂ゆ長〻の旅
のうちと。片時もたゝれぬ法ゝ。こゝゝて養育ゆ〻ゝ大恩
うけ伯父人ゆ。露だゝらの報もせで。かく遂ゆ死姿をゝる悲
さゝと。ゝ〻ゝぞさゝる音なき躯ゆ。泣さけび。抱あげてゝむせゝり。ゆをとめ〻ゝぞ泣伏ゆ。此時又以前の鳥一法ゝひ
来りて空高く飛ゝ〻ゝと。遂ゝ。ゝ〻ゝ声と同ゆ哀ぞ
ゝゝ。千代童ゝれとゝ〻ゝ。扨ゝ父母の霊魂ゝ〻ゝ。

幼子とのひ旅路と少し便とさびし伯父人を失ひ。誰を力み敵を打だれ。
こゝろのけうひきれ此方あれば共み冥途ふおもむれて親子ひろふ
さびし。待る人父母うと。のひてい平沙みたつを伏し。共み冥途みるる
てゝと。のひてい空をあゞれて。声ゆゝだうと泣けさび。親を空空無の
涙をふしう。波の雫と散ゝ。千代童はひみ心を決し。空を舞親
鳥のうゝとあけやとうと答て。小石を拾て袂みれ嵩上みかけ
あゞりて南無阿弥陀仏くとこする声とあるうもふ。海みざんぶと飛入しゞ。
折しゝうと打ようる。波のうぬりふ乗らるて。陸のゆこふ打上くと
ければ。さそを浅瀬みてあはしうと。ゆゝ起あゞて。深ゝやあうとえゝ
て。又飛いんとさそう所み。却ひうけざるか背后の方うもやれまて走び
と声うけて。抱こゞりたうを高野非事理の旅僧みぞあうる

○かくて千代童危処を旅僧みとゞめらるて。一命をたゞち。旅僧
養育みあゞうて為人。ゝこさゝゞの雅儀みあひしゝが。つゝふ敵
熊をおて。母の霊前み手向。孝行の功徳みうて天地神明の
憐をかうふり。高禄の武士となり。富貴の身となり。支ゆ。
旅僧の出身素姓等。後編み詳あうも。他日発兄の時を待得
てゝ伺ゞし。

○世範とふ書み記せるかゝふを抄出て。童子み示とこれ本文
孝子の物語み因あれば有ゝ。おゝて人たる者。嬰児の時ハ父母と恋
こと至て親切あり。父母も又児のひとけ有ゝを愛念ることを甚
憐ゝ養とふくゞとふとを。これ父母の気血ゆゞ分とゝ
相去ことゝ遠うゞ。母ゝ嬰児の言声その笑かうつゝ。最

愛らしくしてあられまるくなり。此造物者天地自然の道理を設をして生ることはまりかくまもるなり。乖鳥走獣の形微小なるまでも。その子をおもふこと人み違ことなし。その愛ところとなりて甚若人ありてその子に傷ことあれば。これをまもりて其身の殺さるゝをもかへりみず。盧山の遠法師始信なりし時。猟を好しがあるを時鶴のひなを捉とりて親雇をるゝことをかなしみ。その身死せるを因て腹をさきて腸をみさけちぎりて忽弓矢を折菩提心に起し。恵遠法師となりし由。劉氏鴻書巻之八十九みえたり。乖走合昊の子に別むことかのごとし況人みおのゝ父母愛念抜育の大恩詞を言はゝ尽がたし。幼時父母と暴し心為人みいとゝ薄なるはなをや。身を終るまで父母の顔色みそむゝ。

養をもりて孝道をはげくしとゝ。ひみその幼少の時愛念育しまゝ恩をば報ずることなりがたし。凡世間の孝道を尽をとゝあるいざる者。他人の嬰児を三月あゝるゝ。其情愛の厚を見て我父母の苦労せられしとおもゝ。自悟べきなり。父母在世の時孝道なりをば。父母身まかりて後悔おもふとも更みそのかひあるべくゝ。父母年老身体おとろへて力とをゝ子のゝなり。若其子不孝なるべいるも悲しかるん。察しおもひて孝道をゝげむべき市振の宿みいるとゝ。夜中なるゝ。夜中なるべ病をもとむべき便なく。むなしく

阿武隈川

第十四 條

ゝゝも良門を修行者み姿を扮して。力と笈のうちみかしたゝみ

通過て立山の禁みぞさしつゝとゝめぬ此時遠寺の鐘をかぞへれば。
いつゝぐ二更の時あり名ごさて坂道の半なりをとゝぐるみ。松の林の裏
ゝゝとあらしく紀大男。足いひろく歩〻ゝ肩を高くはゝとして出たり。良
門これをえるみ。二人ともみ身のたけ六尺有餘ゆて。眼ざしハ狼のごとく。
鼻つゝ紀ハ野猪のごとく。髭ハ熊のごとく生ちゞれたるが。枯草もて編る
頭巾をいゝゞ紀。ぎゞさかをおびハ角みけづりたる杖をつき。前後みゝ立
ふさがりて道をさへぎりて。岩が根みゝ杖つきあゝじて。山彦たく吼どゝろきて
いゝく。小童よゝ紀処ハ来りしぞ。我くハ此山住の盗人なるが。汝をつれゆきゝ
てもちゝる所あるなり。とく手ゝつゝれて同じめ紀うけゝさもあらばハ此
杖ともて。立地みゝ打たゝ。體よゝと命をおびいだきんとぞよばひける。良門呵〻
と打笑。汝等が為体誰ゝ盗人みあらじとえんやゝく耳の穴をとゝぐもそ。

我ゝふこゝ紀をとけ。そもく同国の修行者ハ。木立を以て帳とし草叢をもて
褥とし。山小徊〻野みゝ伏。谷水を掬て渇をとゝけ。木の実を拾て飢を
養ひ。ゝとゝゝも身小銭財をたくゝはされば。強盗も目をとゝけど猛獣も害
をなさず。これ菩提の道を行ひ。一所不住の身の徳なり。ゝゝ小汝
等丈ハ恣みおひのび。飽きぞおゝゝひて肥太。ゝて盗人の骨柄みてあり。
貪き修行者の物を奪んとゝゝ盗の秘音占みや。笑止の支そたゝむ
我身ゝゝの物をゝるゝも笈仏錫杖賊家みあゝて盗ひ。又雨露小破已
ゝる古布子ひくたくの價うあゝんよしあゝて物と目みゝけど。若汝等が懐中
み盗ゝゝゝゝる銭財あゝば。我斎糧小ゝてとゝくこを辺ゝゝたゝし又我引
道の語をとゝけて。死出の旅路みゝゝむんや。返答ハゝみとのひければ盗人ども
大み怒。えゝけ小似合ゝを大膽ゝる小童ゝゝ。汝を捕ゝハ銭財を歌ゝゝみ

めぐる。此山の大王人の生膽を好くもつ由なるみ。汝をあそびて寝酒の肴にたべつるなり。膽太くそ幸なれ。ぬぎ来れとのひて。良門が襟首つかみ引たをんとするる。大木のえんぬきたるごとくにて。少も動ことなし。一人の盗人これをみて。こゝやあるかなうとのひて。おなじく小襟首つかみ。兩人一度にかをきはめてひたをんとするる。千びきの岩み取付たる如みて。益動ざれば。只あたをたるだうとなり。良門やがて錫杖なげをて。両手以あげて引こをる。左右の小眼みえさかえ。あらたをければ両賊ともみ一声呼とさけびて。たちまち両眼とび出てぞ死しにける。かくて良門両人の死骸を谷底み蹋落し。錫杖を拾取鉦打ならして。つづみ十歩ばかりあゆみとゆけるみかの林のうちより又十四五人の賊手鉾大斧を打ふて。おりたさけびて走出たるを。良門これをみて

笑とおろしかをおびかの賊どもみなひ合ひきよをてのれぢ首よしまいつるを弱腰はたをて。人つぶてみなげたをければ岩石よ打はけられ。身体微塵よ砕て死たるもあるとたち合して相共丹血を吐て死たるあり。或を腰を打をゝを高這て逃もあるを。或い腕を引ぬられのけふ倒て伏たるもあるを。敵しかくぞえんたをける。たるふ笛ぶえあんたをる吹立けるが。又大勢走出て四方一度ふとりかけたをを。良門力よ血とぬんもはをとやおひけん。傍よ生出たる大木を根ごふ引抜て目よりたくさんげ力よまををて打けるぞ。一度うをべ二三人ひしく頭胴ふめををて死し。一度おどれば四五人連て谷底へまろさををゆぞ打たをける。誠ことわざ図れたをたきをり。此時たをりよ大鼓の音ひゞき残る者どもたをくと乱をて。もの林のうちふ逃入けれが。良門大木をなげを

良門修行者ハ
身を捨て深夜
立山の麓を
こぎつたへて
山賊をたゝかひ
勇をふるふ

大手をひろげて追行ぬ。さて林のうち月の光をかくし暗こと〻して東西を辨ぜず。すゝかゞなる所み。螺の音大みひゞきて四方一度み猛く燃よりぬ。良門い火の中みはゝまれ。風みつれて炎のまうせ才上み形かゝる。烟よりもびけれぞ。さゝどゞの大丈夫も大み狼狽し。逃いでんと走まわるけるが。たちまち阱をふゝぬ。まつさしゐみありて。深底みおちいりぬ。此時又蹄の笛大みひゞく大勢の盗人明松をふるてゝし て馳集。いやがうへみおりうさ寄り。良門ゞ手ゝと足ゝて引あげ。宛能い を捕たるごゝく太苧縄を以てぐるく巻みゝて。笈錫杖とゝり来て。良門をかゝみ立前後左右をゝり巡み。明松をまつさゝみ振たゝ。百方山深くあてもなぬ。良門を日来の勇気みに似ず。唯打ぢわゝてひゝれ心底。ゝゝゝも峯越の夜風をげしく梢を吹ゝし。

渡おりる谷の水音いとゝゝ凄く耳みひゞく。梢をつゝふ山猿岩間みに鵯鼠も人をあなどる風情をり小柴高菅ふゝりて苔むゝなる石橋の。あやうけをを打渡り。陂をつゝひ谷を越。雲をゝけ霧分ひゝゝて一里ゝゝりもひゝり来つゝんとゝゝ時。岩をゝりひゝゝて。大なる石門を多へなる所みつゝぬ。盗人ども良門を門内みひゝきいゝ柱ゝさゝびくつゝみゝて守居たり。良門頭をあげて顧れば。廣大なる岩窟みて。石鍾乳氷柱のごゝくみさゞり。清水ゝゝゝて石燕とびいゝみも湿地の様体あり。正面みハ大なる草屋あり。尽く縄かゞげふして造みせり。奥深くして限をゝるべゝゝ。廣庭み鉄篭をゝゝみて火をたゝ。明てゝして昼のごとし。弓。箭。手鉾。長刀。鐇。鉤。縄のたゞひゝと左右みうけなゝべたるが。火の光みかゝやゝて殺気人を圧して形

勢あり。さてかの盗人ども。此はとゝゆく大王みやせとゆひて。一人を草屋の奥みはらへ〜はなつ。摧ありてゆで来り。大王の爲式処へ打ちとゝりよゝひて。はち〜猪の皮の褥を敷き。紫微木を以て造りたる脇息をとゝゝて待さゐ。ちりゝ。わどゝく大王と称ぜしゆで来りとゝるふ年のころハ七十前後と見る老賊あるとゝ。才の丈ハ七尺ふちゝく頭の毛ハ銀の針線を乱しかけたるみひとしく。髭ハ三尺ばかりとおたゝて雪中の柳ハ類し。面ハ光悪みして朱をぬりたるが如く外皆さゝちゐよさらのごりて。眼光電のひらめくみ似たり。偏是関羽ハ白髭をしごゝ考めたるが如し。打扮をゝるふ。萌黄薫の腹巻のうつゝ熊の裘を着し。鹿の革袴をはきて。海老鞘巻をさゝ。山の如ぐ坐ゝるごとくみて褥のうへゝ跏趺けて。傍らハ一人の小賊侍ぐ

ゝの。大太力と叫ぶゝてひゝゝぬ。こゝの盗人ども。何ゝ為ゝんさゝゝけるが。ゆゝて良門が叫ぶゝの縄をとゝて。大王の目ゝゝて近くひきすゝて左右ハ引ゝゝ地上ゝ伏て礼をとゝゝ良門ハ唯頭をたれゝのゝゝゝして居たゝ。時ハ大王良門をつゝくゝゝり。巨鐘のゝうゝ声ゝてゝひけゝゝゝゝ。童よ。今小賊等がかゝるを聞ハ。汝ゝゝ量ありて。我手下の者を打ゝゝひつゝゝ。奇怪なゝゝゝ。我式山寨ゝハあゝゝの強賊ありて。よく進退かけひゝの道を熟練しつゝゝ。たゝゝ数千騎の官軍ありとも。物の数とせゝど。いゝんや汝等体の小冠者原たゝゝ鬼神の術を学び天狗の業を得たゝとも。ゝゝんぞ敵ゝゝゝ変あゝふゝゝ。我ゝゝゝ汝が生皮をゝぎ。骰子みゝゝゝみて。手下の者の仇を報んと欲ゝども。手を穢んも益なし。我曽て

酒を好み。酒ハ人の生膽をうばへ。その気つよくなりて旦味甘
美なり。汝大膽なるこそ幸あれ。今膽をとりて寝酒にあらるる
ぞ。念仏をとなへんと思ひつるこゝろ。ふだーと声あらかはに詈。小賊等を
ひつとらへて。そもく手をとゞめこそ命をけ。一人の小賊かしこまりて。
手桶に水を汲入て持ぞ。良門が髻つかみてのけさまに引倒し。
柄拘をとりて胸の上に冷水をそゝぐ。これ何の為ぞ。あれは原人
膽ハ苦味なるものなれども。かくして胸間の熱気をさまれば。こゝろ
甘味となる。且膽ふるとなり。水をそゝぎ終れば。又一人の小賊銅
器に水をたくへてたゞさへぞ。こゝに膽ハ苦味なる器なり。又一人長
さ刀を提て立出。直利と抜たる剣の光明晃〻として。日月ひとし鏡
をひらめかすが如くなり。嗚呼危哉良門が一命。五更山に出る月の